

# ペイター、ワイルドにおける美的距離とその行方

——『ドリアン・グレイの肖像』を中心に

野末紀之

## はじめに

唯美主義の代表的小説、Oscar Wilde の *The Picture of Dorian Gray* (1890/91) の主人公ドリアンは、みずから恋人 Sibyl Vane の自殺を招いておきながら苦痛を感じることができないと述べ (86)、また人生の苦痛から逃れるにはその観客になればよいと嘯く (94)。これらは当時の保守派のみならず一般読者の非難を容易にかき立てる。ワイルドは、ドリアンを唯美主義者の典型として読者を挑発しているのか。それとも唯美主義の批判を行なっているのか。また、ドリアンに大きな影響をあたえる Henry Wotton はしばしば Walter Pater の言葉を口にすが、これをどう受け取ったらよいのか。

## 1. 『ドリアン・グレイの肖像』における「美的距離」(審美化)の問題

ドリアンはヘンリーに感化されている。ヘンリーは「ぼくは芝居が好きだ。人生よりはるかに現実的だからね」と言う (69)。彼は、シビルの死を、女優にふさわしい役柄を最後まで演じたのだと述べて、若者の動揺を抑えようとする。だが、その言葉は一時的な気休めではなく、彼に特有の見方から発している。ヘンリーはドリアンをも興味ぶかい研究対象として眺めているのである (50, 51)。

実人生における(しばしば悲惨な)出来事を芸術的枠組から距離化し美化すること(審美化)の孕む問題は、それにより当の人物の存在を、その身体も記憶も、まるごと抹消することにある。ヘンリーの女性嫌悪がそれを助長する。彼は、「シビルに残酷なことをした」というドリアンにたいし、女は支配されることを求める野蛮な生物だと答える (88)。これは彼を批判的にとらえるよう読者をうながす。

作品の終わり近く(第19章)でドリアンは、いまだにシビルの面影につきまといまわっている。彼は、Hetty Merton という若い村娘に死んだ恋人の姿を重ね、交際をつづけるが、とつぜん縁を切る。そのことで身分違いの結婚をせず済んだこと、つまり道徳的な行動を取ったことを彼はヘンリーにむかって自負する。これにたいするヘンリーの台詞は、シビルの死のときよりも冷酷である。彼は、オフィーリアのように湖に浮いているヘティの死体を想像する (177)。

注目すべきことに、ヘンリーに骨がらみの審美化の視線はバジルについては発動しない。新聞で取り沙汰される画家の死について、彼は文学作品を援用しての悲劇化を行なわない。その代わりに、画家殺害を仄めかすドリアンの台詞を一顧だにせず、バスから転落してセーヌ川に浮かぶバジルの姿を想像する。審美化は、女を対象とする場合に限られるようだ。

## 2. 先行小説にみる「美的距離」への批判

ふたりの男による審美化へのワイルドの見方は、唯美主義批判をもくろむ他の作家の先行作品と共有されている。1870年代と80年代の代表作からひとつずつ取上げる。

まず William Hurrell Mallock による *The New Republic* (1877) である。この作品をワイルドは雑誌掲載中 (1876) に読んでおり、手紙のなかで「たいへん巧みだ」と賞賛している (*Letters*, 26)。

この作品では同時代のさまざまな思想家や文学者が風刺されるが、そのうちのひとり Mr. Rose にペイターの姿が重ねられている。ローズは無害で無邪気な夢想家の趣があるが、ひとつだけ彼の冷酷さを示唆する箇所がある。ローズは、不幸な女がテムズ川に身を投げる場面との遭遇を心待ちにしている。女の死は、美しい自然の光景と調和し、名高いフッドの詩「溜息の橋」により流布された物語の一コマと化す (*NR*, 125-6)。ここで問われるのは、唯美主義者は悲惨な現実をみずからの快樂のための格好の対象とするのではないか、いや現実の不幸を期待しさえするのではないかということである。D. Donoghue によれば、この一節はペイターの痛手となった (Donoghue, 64-5)。「The Child in the House」(1878)や *Marius the Epicurean* (1885) で展開される「他者の苦痛への共感」というテーマは、そうした非難への応答と見なすことができる。

もうひとつは Vernon Lee の *Miss Brown* (1884) である。この小説では、主人公 Anne Brown の庇護者である Walter Hamlin (D. G. Rossetti がモデル) が俎上に載せられる。アンをはじめて見たハムリンは異国風的美をもつ彼女の出自を非西欧だと思いこみ、あれこれと空想をめぐらす。アンは「私はイギリス人」と言ってその愚かしさを暴露する。Kirsten Macleod は、Margaret Stetz の言う masculine connoisseurship への批判をここにみている (Macleod, 63)。これより辛辣なのは、唯美主義者たちに不満をつのらせてゆくアンが、ハム

リンの所有する土地で雑居する貧民たちの境遇改善を彼にもとめる箇所 (MB, 175-6)。ハムリンはその場所を視察に行くというが、それは詩の題材として利用するためにすぎない。リーはここで、他者の生を犠牲として芸術制作にはげむ唯美主義者の反社会性・自己中心性に異議申し立てを行なっている。風刺される人物のひとりにはワイルドがモデルであり、両作家はお互を嫌っていたようだが、唯美主義批判においては軌を一にしている。

### 3. 『ドリアン・グレイの肖像』における「美的距離」の行方

シビルの死後、審美化の視線は脅威に晒され、また無効化される。ヘンリーの言葉を受け容れて安心したかにみえたドリアンは、シビルの検死を伝える新聞記事に恐れおののく (106)。その事実は、「醜く」また「恐ろしいほどなまなましく」、いかなる審美化も拒否する。これは、のちのドリアンの「美学」をひそかに準備している。シビルの兄 James の存在も、ドリアンの忘却への願望を突き崩し、彼に大きな脅威となる。女の死を芝居のなかの出来事と見なす視線は、現実によって裏切られる。他方、ヘンリーがドリアンにあたえた「黄色い書物」も T. Gautier の詩集も、審美化のための拠り所となつてはくれず、忌避すべき現実を思いださせたり、現実からの一時的逃避の手段となつたりするにすぎない。

審美化を無効にするうえでもっとも大きな役割を果たすのが肖像画である。通常の絵画とは異なり、それは邪悪なものへと表情が変化し、観察者であるドリアンを見つめ返してくる。いまやその唇はこちらに向かって残忍な笑みを浮かべている (90-1)。ヘティへの「善行」は錯覚であり、肖像画の表情はさらに残酷さを増し、狡猾さや偽善の表情をおびている。ドリアンは、肖像画がみずからの「良心」であったことをあらためて悟る (187)。読者は、ここで主人公が真の改悛へと舵を切ることになると予想するものの、次の瞬間、それが誤りであったことに気づく。ドリアンは肖像画を破壊する決意をし、それを実行に移すからだ (187)。彼につきまとう逡巡や動揺により、読者は彼を批判的にみることになる。

ヘンリーの場合はどうか。彼がドリアンを「実験対象」としていることはすでに述べた。しかし、その試みは機能すらしていない。彼は、ドリアンがロンドンの阿片窟や犯罪の巣窟に出入りするようになることを知らないし、若者によって示唆される画家殺害にみずから目を閉ざしている。ドリアンがひそかに望んだと思われる秘密の共有への願望を彼はあっさりと退けてしまう (178)。

そのあとの会話でふたりの距離があきらかとなる (181-2)。ドリアンへのヘンリーの見方は当初から変化していない。若者が美的対象にとどまりつづけることを賞賛する言葉は、相手にも読者にも空虚にひびく。社交の場で当意即妙な会話の名手として圧倒的な存在感を示しつつづける彼は、それゆえいっそう、ドリアンの「魂」にたいする盲目を印象づけずにはおかない。

裏社会に出入りする経験をつうじてドリアンの身体にはあらたな「美学」が刻印される。「醜悪なものなまなましさ」である (156-7)。醜悪なものへの嫌悪が反転して、このように身体化されたのだ。これもヘンリーの理解を超えた思想であろう。そこに、「芸術と歌」による生の充実を説いたペイターへの批判がふくまれているのか、それとも、「結語」の思想を刹那的快楽主義と「誤解する」彼自身をふくむ若者への警告が示唆されているのか。今回の発表では両方の可能性を示唆することとどめ、あらためて考察する機会を待ちたい。

#### 参考文献

- Donoghue, Denis. *Walter Pater: Lover of Strange Souls*. New York: Alfred A. Knopf, 1995.
- Lee, Vernon. *Miss Brown*. [1884]. *New Woman Fiction, 1881-1899. II*. Ed. Karen Yuen. London: Routledge, 2010.
- Macleod, Kirsten. *Fictions of British Decadence: High Art, Popular Writing, and the Fin de Siècle*. New York: Palgrave, 2006.
- Mallock, W. H. *The New Republic; or Culture, Faith, and Philosophy in an English House*. [1878]. Ed. J. Max Patrick. Gainesville: University of Florida Press, 1950.
- Pater, Walter. 'A Novel by Mr. Oscar Wilde.' [1891]. *Oscar Wilde: A Collection of Critical Essays*. Ed. Richard Ellmann. Englewood Cliffs N.J., Prentice-Hall., 1969. pp. 35-8.
- . *The Renaissance: Studies in Art and Poetry. The 1893 Text*. Ed. Donald Hill. Berkeley: University of California Press, 1980.
- Stetz, Margaret D. 'Debating Aestheticism from a Feminist Perspective.' *Women and British Aestheticism*. Ed. Talia Schaffer and Kathy Alexis Psomiades. London: University Press of Virginia. pp. 25-43.
- Wilde, Oscar. 'Letter to William Ward.' [1876]. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. Ed. Merlin Holland and Rupert Hart-Davis. London: Fourth Estate, 2000. p. 26.
- . *The Picture of Dorian Gray*. [1891]. Ed. Joseph Bristow. Oxford: Oxford University Press, 2006.